

主のご降誕、おめでとうございます！

修道院の玄関先にプレセピオが設置されました。一体の大きさは、3センチくらいですが、パレスチナを思わせるようなジオラマになっていて、ミニビームライトと電飾で道行く人の目を引くものです。このプレセピオを通して一人でも心が和む人がいれば、その人の中にイエスが生まれたと言ってもいいかもしれません。



第45回日本カトリック映画賞 授賞式行われる

『コンプリシティ/優しい共犯』 近浦 啓 監督 / 2020年作品

授賞式&対談 2021年11月20日(土) カトリック浅草教会

第45回日本カトリック映画賞授賞式と対談が11月20日にカトリック浅草教会にて行われました。授賞作品は『コンプリシティ/優しい共犯』（近浦啓監督/配給：クロックワークス）。コロナ禍のため授賞作の上映はなく、授賞式と対談（近浦監督と晴佐久昌英神父）のみの開催となりました。（関係者のみ出席）土屋至シグニスジャパン会長挨拶の後、晴佐久神父により以下の授賞理由（一部）が述べられました。

『コンプリシティ 優しい共犯』は、現代の孤独な日本を救う力を秘めた映画だ。人と人を隔てる壁を超えて他者と家族になっていく物語であり、そのためには時に掟をも超えた優しさが必要だというリアルが描かれているからだ。イエスは、働くことを掟で禁じられている安息日に病人を癒したことを批判された時、こう言った。『あなたたちの中に、自分の息子が井戸に落ちたら、安息日だからといって引き上げてやらない者がいるだろうか』。映画の中で、主人公の技能実習生を雇ったそば屋の主人にとって、一人の『外国人労働者』が法律よりも大切な『自分の息子』になっていくという、その優しい共犯を映し出す画面の向こうに、日本の希望が透けて見える。（中略）乾き切ったこの世界を瑞々しい想像力で潤すことこそは、映画の使命であろう。人を遠ざけるコロナの時代に、人を結ぶ使命感を持った気高い映画に出会うと励まされるし、私たちもその映画を励ましたいと思う。」



その後、賞状およびトロフィーが授与され、近浦監督からは受賞の挨拶が述べられました。スーパーで数百円で肉が買えるこの時代に、ベトナムの技能実習生が研究用のヤギを殺して食べた事件に衝撃を受けたこと、中国の技能実習生の取材を続けるうちに、実習生たちの中に自分自身を見るようになったことなど、さらに自主製作したこの作品が海外の映画祭で評価された喜びなどが語られました。

授賞式後、映画をめぐっての対談が行われました。外国の技能実習生と自分を一体化してしまった近浦監督。ベトナムの技能実習生たちを教会に招いて毎月食事会をしている晴佐久神父。ふたりの間には初めて会ったにもかかわらず、旧知の“仲間”のような雰囲気を感じられました。近浦監督は、映画づくりの現場では自分の意図以外のものが映るのが面白いと語り、晴佐久神父は、仲間たちと一緒に活動していると何か不思議なプラスアルファの力が働くと語るなど共に「自分以外の何か」からいただく力について話し合う姿が印象的でした。「現代社会に不足しているのは、労働力ではなく、想像力だ。目の前にいるこの若者がどんな痛みを抱えているのか。故国にはどのような家族がいて、これからどう成長していくのか。そこに思いを馳せることが出来て初めて、私たちは人間らしく助け合って生きていくことが出来るのではないか」授賞理由の一節が深く心に残る対談でした。

（映画チーム 鈴木 浩）



酒井広報担当司教とともに 教会の広報について考える



この2月の司教総会において、広報担当司教に大阪大司教区補佐司教の酒井俊弘司教が任命された。そこで酒井司教が上京された10月25日にシグニスジャパンの土屋会長、井手口副会長、町田事務局長の3名で面会することができた。この面会を設定された中央協議会広報課の佐藤隆治課長も同席された。

その席ではシグニスについてのご理解を得るとともに、カトリック教会の広報活動を進める上でシグニスに何を期待されているのかをお聞きするのが主眼であった。酒井司教は「まだ着任したばかりなのでそれを今考えているところです。ぜひ一緒に考えていきましょう」と述べられた。

そこで私たちはさっそく2022年の2月に予定されている「教会とインターネット」セミナーを「酒井司教とともにカトリック教会の広報について考える」というテーマで行うことを提案したところ、酒井司教の講演とともに、2月19日（土）に「第25回教会とインターネットセミナー」を行うことが即決された。

シグニスジャパンは、かつては事務局が中央協議会におかれていて、事務局も中央教職員が担当されていたくらいに緊密な関係であったのだが、いまは疎遠になってしまっていた。これを機会に担当司教や中央協の広報担当課とのつながりを密にして、ともにカトリック教会の広報活動をもり立てていきたいと強く願う機会となった。（土屋 至）

シグニスアジア会議

日本からは JLMM の漆原比呂志氏がプレゼン

昨年同様今年もシグニスアジア会議がオンラインで開催されました。時差が西端のパキスタンと東端の日本では4時間、時間割はちょうど真ん中のタイ・バンコック時間で表示されました。11/17-18はウエビナーによるセミナー、テーマは「Partnering with People-centered Development Initiatives」(人々を中心に据えた開発運動との連携)。3時間強/日。14カ国 約100名の参加、日本からは土屋会長以下8名が参加。

シグニス副会長 Mr. Lawrence John (マレーシア)の開始講話に引き続き、Dr. Bernard D'sami (インド)の「アジアの現在の課題・挑戦」と題する基調講演があり、その中で、国家の権力の増大、民主主義の未成熟、多額の兵器輸入、貧困、特にCOVID-19による出稼ぎ/移住労働者の失業、難民、国内で排除の人々に対し、アジアの文化の中で貧しい人々との対話、宗教を通して、国家と共に資本主義の行き過ぎを留める必要性が強調された。その後各国からの報告・発表があり、特に印象に残ったのはミャンマーの政治状況と国民統一政府への期待、アフガンの脆弱な女性の権利、また追いやられた人々を力づける草の根活動の成功の秘訣はプロジェクトを始める前に共同体を作る Community building アプローチとの発表。

2日目 JLMM(旧名称:日本カトリック信徒宣教師会)の漆原比呂志事務局長が「Live Together and Share Life with People」(人々と共に住み生活を共にする)の題でプレゼンし、お金やモノではなく、人を送る形態で現在までアジア・太平洋地域の17カ国にボランティアを派遣し、この新型コロナ下の現在は、オンラインでの派遣前研修&体験ツアーをし、困窮家庭へ緊急食糧支援を実施中。また東日本大震災後にはCTVC(カトリック東京ボランティアセンター)に協力して仙台教区を支援し、今は鎌倉で、アルペなんみんセンターと連携して、



12名の仮放免難民を支援している。これらの活動では、ノン・クリスチャンの方々とも協力している。この発表はとても強力な印象を与え、チャットには驚嘆の声や感謝の言葉が続いた。またシグニスアジアのコミュニケーション・ラボの研修者が以前カンボジアでJLMMのボランティアの浅野さん取材したとの話も飛び出て、皆で不思議な繋がり(縁)に感動した。

広報担当の酒井俊弘司教様も2日目のセミナー風景を覗いてくださり、「シグニスアジア会議は大変興味深いものでした。それぞれの国の発表に圧倒されましたし、漆原さんのプレゼンもとても良かったです。」とのコメントをいただきました。

また漆原比呂志氏は、「この度は、シグニスアジアを通して、アジア各国の方々に向けJLMMの活動についてご紹介する貴重な機会をいただき、ありがとうございました。JLMMは海外にボランティアを派遣するグループですが、CTVCと連携した東日本大震災被災地支援や、アルペなんみんセンターと連携する日本の難民支援など、日本国内の課題や取り組みについてもアジア各国の方々とも共有させていただけたことは大変意義深かったと思います。シグニスアジアのメンバーの皆さんもとてもアットホームな雰囲気、それぞれの地で多様な課題に取り組みながらも、ひとつの精神をともに生きているのだという実感が得られ、励まされました。このアジアレベルのつながりによって、今後もお互いの活動を深め合っていけますように！」と書いてくださいました。

最終日、3日目は各国会長が参加してのシグニスアジア総会(代議員会)で会議の幕を閉じました。

(町田雅昭)

シグニスメンバーから 今年のひとこと

SNN-AMOR から

「SNN-AMOR」としての団体会員である私たちが発行しているウェブマガジン「AMOR 陽だまりの丘」(以下AMOR)は、先月に創刊5周年を迎えました。手探りで始まった本誌も、最近は少しずつ認知していただいている手ごたえの中で発信を続けています。その11月の特集では、「福音宣教とメディアの新時代 キリスト教系メディアのみなさん 大集合!」と題して、おもなキリスト教系の新聞・雑誌や電子媒体の編集長の方々から声を寄せていただきました。紙媒体ならではの「思いがけない出会いがある良さ」、「手に取ることのできる良さ」が伝えられるとともに、ネット媒体との共存と補完関係に期待する、実感あふれるメッセージが満載です。キリスト者の世の中のかかわり方、教会と福音宣教それ自体への反省をも響かせる、これらの声が集まるのは実に画期的なことで、AMOR5年間への贈り物と感謝しています。ぜひ、ご一読ください。これを力に、今後の展開にも努めていきたいと思えます。なお、創刊5周年を機に「AMOR友の会」(仮称)も立ち上げました(AHOR告知欄参照)。みなさまのご支援を正直に求めつつ、心に花を咲かせていけたらと願いをこめる、今年のクリスマスです。

(石井祥裕 AMOR 編集長)

URL = <http://webmagazin-amor.jp/>



ひとこと

毎日発表されるコロナ感染者数に一喜一憂しながら過ごしたコロナ禍2年目が終わろうとしています。いのちをつなごうと医療従事者、保健所の方々在必死になっている中、社会復帰、職場復帰をしいのちを活かそうとしている人々を、黒い煙によって数秒でいのちを絶つという事件が起きました。なんだか力が抜ける思いです。さらに、キラキラと輝いて見えたミュージカル女優が亡くなるというニュースが加わりました。自殺の可能性があるということで、ニュース報道の締めくくりには必ず「ひとりで悩まないで相談して・・・」というメッセージが流れています。「♪ やみに住む民は光を見た～」と歌う今、光となって来てくださる救い主が、すべての人に心の平和を与えてくださるようにと祈ります。(Sr.清水京子)

映画『祈り-幻に長崎を思う刻-』

日本は、原爆を投下された唯一の国です。原爆を正面から取り上げた映画の数は多くありません。戦争の記憶が薄れていく中、なぜ今、「祈り-幻に長崎を思う刻-」が公開されたのでしょうか。

この作品は、昭和34年、長崎出身で、カトリック信徒の田中千禾夫氏の舞台劇『マリアの首-幻に長崎を思う曲』が原作です。戦争の記憶が薄れつつあると感じ、書いたと舞台劇の初演のときに書いています。田中氏の作品のいくつかは舞台で見っていますが、とても難解です。

この作品に出てくる人々は被爆という事実苦しめられた人々です。その人々の苦しみ、哀しみは、ある種祈りであると思えます。神の愛を思うとき、その祈りは神聖なこころの響きになるのではないでしょうか。この作品が今制作され、公開されたのには、戦後76年を迎え、日本が戦争に荷担していたという事実が忘れ去られつつあるとき、マリア様の首を守ることで恨みではなく、祈りや許しによって戦争ほど悲惨で残酷なものはないということ訴えている作品ではないかと思えます。

(鶉飼恵里香)



映画公式サイト <https://inori-movie.com/>

ひとこと

秋になり、本当に久しぶりに映画館で映画を観ました。『浜の朝日の嘘つきどもと』(タナダユキ監督)福島県南相馬市に実在する大正時代に建てられた映画館を舞台に、映画と映画館が大好きな人々が登場する、すてきな作品です。実は、2019年秋、私たちシグニスジャパンは、この映画館で、日本カトリック映画賞授賞作品を上映することにしていました。現地の「朝日座を楽しむ会」、「カリタス南相馬」の方々との連絡を取りながら、当日を楽しみに準備していたのですが、あの台風19号のためやむなく中止となったのでした。そしてコロナ禍が始まり、未だ実現できずにいます。このようなわけで、映画になったことを知った時は、とても驚き、わくわくして劇場に足を運びました。大きなスクリーンいっぱい広がる、「朝日座」を巡って展開される世界に、思いっきり浸りました。いつかきっと、南相馬のあの場所で映画を上映できたら、と夢んでいます。(泉 塩子)



朝日座(1923年に芝居小屋を兼ねた施設「旭座」として地元の有志によって建てられた。

日本カトリック映画賞

日本カトリック映画賞は授賞式&上映会で多くの方とともに授賞作品を鑑賞し、そして監督と晴佐久神父との対談を聞き、なぜこの作品が日本カトリック映画賞授賞作品なのかを感じてもらおう、というスタイルを続けてきました。しかし毎年、世界広報の日のあたりに開催していたカトリック映画賞の上映会は、新型コロナ感染拡大のため、昨年に引き続き今年も開催することができませんでした。来年の上映会もめどが立たない状況が続く中、私たちは今年度のカトリック映画賞選考の時期を迎えています。上映ができない中で、どんな作品を選べばメディアを通じた福音宣教となるのか、途方に暮れるような気持ちになります。そんな時に思い出し、握りしめる言葉があります。「日本カトリック映画賞とは、今この時、こんな状況だからこそ選ぶべき作品、見るべき作品がある」顧問司祭の晴佐久神父様が選考会でおっしゃった言葉です。候補に挙がる作品はどれも素晴らしく、いつもどの作品を選ぶべきか迷います。コロナ禍という状況の中でシグニスジャパンが選ぶべき映画はどれか。私たちが日本カトリック映画賞というにふさわしい、まさに今だから見るべき映画作品を選ぶことができますように、どうぞお祈りください。

(映画チーム 大沼美智子)

シグニス 2021 年「応援映画」より

★画像をクリックすると公式サイトにつながります。



この一年、シグニスを支えてくださった皆さまに心より感謝いたします。

新しい年が、幼子イエスからの光に照らされた明るい年でありますように！
よいお年をお迎えください。

シグニス ジャパン一同



賛助会員募集

と一緒にメディアを通して福音を伝えていきましょう！

わたしたち SIGNIS JAPAN の活動をサポートしてくださる賛助会員を募集しています。会員の方には、ニュースレター「タリタ・クム！」(年3回発行)をメールまたは郵便にてお届けする他、賛助会員と共に捧げる感謝のミサを東京地区で行っています。詳細は賛助会員の皆さまにご連絡させていただきます。年会費 3,000 円。ご入会いただける方は、氏名、住所、連絡先を下記までお知らせください。どうぞよろしくお願いいたします！

〒107-0052 東京都港区赤坂 8-12-42 聖パウロ女子修道会内 SIGNIS JAPAN / info@signis-japan.org

会費およびご寄付は、下記へ振込をお願いいたします。

郵便振替 口座番号 00100-0-594547 口座名称 SIGNIS JAPAN 代表者 土屋 至